

大学生の反乱

米国の大学では学生たちが逮捕、停学、住居からの立ち退き、退学の弾圧を受けている。彼らはガザのジェノサイドを止めるための最後の、そして最善の希望である。

クリス・ヘッジス (Chris Hedges) 著、脇浜義明訳、田中一弘補訳

Consortium News, 2024年4月26日 *脚注はすべて訳注

注：4月23日、プリンストン大学でイスラエルのガザ虐殺と米のイスラエル支援に抗議する学生集会で元ニューヨーク・タイムズ中東支局長が演説していたとき、大学のスクール・ポリスが突入して、彼を連行した。これに関して、ヘッジスは次のような声明をコンソーシアム・ニュースに送った。

「ほとんどの大学と同じように、プリンストン大学は、学生活動家の監視から穏健な形の反対運動を犯罪扱いするなど、過剰反応している。これは抗議の火に油を注ぐ行為である。大学は、学生に怯えているのではなく、つまるところ、わが国の大学の機関が大量虐殺の共犯となっている道徳的退廃を学生が指摘していること、つまり自らが抱えている明らかな倫理問題に怯えているのである。これらの機関と機関を運営する者たちが理解していないのは、自分たちが社会悪に対して何もしていないという事実である。自分たちがどういうものであるか、その真の姿を暴かれているのである。」



Where have all the flowers gone? ¹— Mr. Fish.

¹ Where have all the flowers gone は、ピート・シーガーの作詞作曲による反戦歌であ

アチンティア・シヴァリングム (Achintha Sivalingam) はプリンストン大学院で公共政策を専攻する院生である。彼女は今朝目覚めたときには、午前7時をすぎると自分が、ガザの大量虐殺に抗議したために逮捕され、寮から追い出され、停学や退学処分となった全国の数百人の学生の群れに加わることになるとは、夢にも思わなかった。

私が青いスエットシャツを着た彼女にインタビューしたとき、彼女は時々涙をこらえていた。私たちはウィザースプーン通りにあるスモールワールド・コーヒーショップの小さなテーブルで話し合った。そこは、もう彼女が通えなくなった大学、もう住めなくなった学生寮、あと週間後に卒業する予定であった大学から半ブロック離れたところである。

彼女はその晩をどこで過ごせばよいか分からなかった。警察は学生寮から自分の持ち物を持ち出す時間を5分間しか与えなかった。「手当たり次第に掴みました。どういうわけかオートミールを掴んで持ち出しました。混乱していたのです」と彼女は言った。

全国の学生抗議者たちは大学当局を恥じ入らせるような精神的肉体的な勇気をしめしている — その多くは停学や退学に直面している。彼らは危険人物とされているが、それは大学生活を乱したからではなく、またユダヤ人学生を攻撃したからではなく — 抗議学生の多くはユダヤ人である — 、支配階級のエリートや彼らが運営する機関が犯罪の中でも最大の犯罪である大量虐殺を阻止もしないし反対もしないという恐るべき怠慢を指摘しているからである。

これらの学生たちは、私たちの多くと同じように、イスラエルのパレスチナ人虐殺をライブ配信で見た。しかし、私たちの多くと違って、彼らは行動した。彼らの抗議の声は彼らの周囲にある道徳的退廃に対する強力な対位となる。

イスラエルがガザの大学を次々と破壊していることを非難した学長は一人もいない。無条件の即時停戦を呼びかけた学長は一人もいない。「アパルトヘイト」や「ジェノサイド」という言葉を発した学長は一人もいない。イスラエル制裁やイスラエルから投資を引き上げることを呼びかけた学長は一人もいない。

それどころか、学長どもは金持ち寄付者や企業 — 兵器産業など — や狂気の極右政治家にひたすらひれ伏すのである。彼らは、子どもを含む何千人もの毎日の殺害を無視し、そ

り、ピーター・ポール&マリーによる演奏が有名である。この絵は兵士がもつライフルの銃口にカーネーションを差し込む男性の写真をもとにしている。その写真は、「アメリカの写真家バーニー・ボストンによって撮影されたもので「フラワーパワー」と名付けられかつて存在した新聞ワシントン・イブニング・スターに掲載されたものです。この写真は1967年10月21日に「ベトナム戦争終結のための国家総動員委員会」の呼びかけで実施されたベトナム戦争に反対する大規模デモ「ペンタゴン大行進」の際に撮影されたものです。約10万人デモ隊がリンカーン記念館の前に集まり約半数の5万人がペンタゴンをめざして行進しました。ペンタゴンでは陸軍第82空挺師団の兵士が警備しており兵士たちは入口付近に並んでバリケードとなりデモ隊の進行を妨げました。このとき抗議者の1人ジョージ・ハリスが兵士が構えるM14ライフルの銃口にカーネーションを差し込んだのです。デモ隊と兵士の長時間に渡るならみ合いが続きましたがやがてデモ隊が排除されました。」 <https://starfort.cocolog-nifty.com/voorlihter/2022/10/post-5c87b3.html>

れを非難することをユダヤ人への差別や危害と言い換える議論を構築する。

彼らは虐待者 — シオニスト国家とその支持者 — が自分たちを被害者だと描くのを認めてきた。加害者が自らを被害者とする偽りの言説、それは反ユダヤ主義という言葉を利用して展開されるが、それはメディアを含む権力の中心部が本当の問題であるジェノサイドを隠している。それは正しい議論を汚染する。それは古典的な「反動的虐待」(reactive abuse) ケースだ。不正を非難する声を上げ、長引く虐待に反応し、抵抗していると、突然虐待者が被害者に変身するのだ。

全国の大学と同じように、プリンストン大学も学生活動家がジェノサイド非難する運動拠点としてキャンパス内にテント村を作るのを禁止する方針を採用した。この方法は全国の大学の一致した方針のようである。

大学側はテント村計画を事前に知っていた。今朝、学生たちがテント村建設予定の5か所へ行くと、彼らを出迎えたのは大学公安部とプリンストン警察署の大勢の人間だった。

大学構内のファイアストーン図書館の前のテント村候補地は警官で一杯だった。学生たちが計画の連絡に大学のEメールを使わず、大丈夫と思われたアプリだけを使ったにもかかわらず、計画が権力筋に漏れていたのである。警官隊の中に、プリンストン大学のチャバッド・ハウスの設立者でそれを運営しているラビのエイタン・ウェブ (Eitan Webb) がいた。活動家によると、彼は学生たちの集会に参加して、ジェノサイド反対を口にする学生をユダヤ人差別者と声高に叫んでいた人物である。

警察の包囲の中で集会が敢行され、100人の参加者が演説者のスピーチに聞き入っていた。空には騒々しくヘリコプターが旋回していた。「ヨルダン川から地中海まで、パレスチナは自由になる」という集会の垂れ幕が木から吊るされていた。

学生たちは、プリンストン大学がガザにおける「イスラエル国の軍事作戦から利益を得たり、軍事作戦に関わっている」企業から投資金を引き上げるまで、また米国防総省からの資金で「兵器開発」研究をやめるまで、またイスラエルの大学機関などに対するアカデミック・文化的ボイコットを採用し、パレスチナ人のアカデミック・文化的機関を支持するまで、また即時無条件停戦を大学として呼びかけるまで、抗議行動を続けると言った。

今朝二つの逮捕劇があり、14のテントが撤去されたが、もし学生が再びテントを設営しようとするれば、今度は全員が逮捕されるであろう。

「私の予想を超える弾圧です。奴らは人々がテント村に入って7分も経たないうちに逮捕を始めた」と古典文学専攻の博士課程院生であるアディティ・ラオ (Aditi Rao) が言った。

脅威

キャンパスライフ担当のロシェル・カルフーン (Rochelle Calhoun) 副学長は、23日、再びテント村を建てたら逮捕され、大学から追放処分するという警告を一斉メールを送った。「テント設営に関わり、テントで占拠活動を行い、または警告を無視して不法な

破壊活動を行った者は警察に逮捕され、大学の授業への参加を禁ずる処分を科せられる。そのような処分を受けると学期を終了できないであろう」と、彼女は警告文の中で書いた。さらに、「これらの学生は、停学または退学させることもあり得る」と付言した。

前述したシヴァリングムは教授のところへ駆け込み、抗議学生を守るように教授会動かしてくれと嘆願した。教授は、自分はもうすぐ終身在職権 (tenure) を得るときなので、あなた方の味方は出来ないと言った。彼が教える講義は「エコロジカル・マルクス主義」であった。「本当に異様な瞬間でした。私は前学期に思想や進化、社会変化をもたらす市民的变化について真剣に考えました。それを思うと、教授の答えは度肝を抜くようなものでした」と彼女は言って、泣き出した。

その日の午前7時過ぎに警察は学生にビラを配布した。「プリンストン大学の警告と立ち入り禁止通告」と題するビラである。その中身は、「大学敷地内で校則や規制に違反し、他者の安全と財産を脅かし、本学の通常業務を妨害する行為を行うことを禁ずる。テント村に参加したり本学の行事の妨害はそのような行為に該当する」というもの。そして、禁止する行為を行う者は「ニュージャージー州刑法 (N.J.S.A.2C:18-3) に基づいて挑戦的な違反者と見做され、即時逮捕される」と述べていた。

ビラ配布から数秒も経たないときに、シヴァリングムは「あの二人を逮捕しろ」という警官の声を聞いた。

経済学博士課程院生のパキスタン系のハッサン・サイード (Hassan Sayed) はシヴァリングムといっしょにテント設営をしていた。彼は手錠をはめられ、シヴァリングムは手の血流を止めるほどきつくプラスチック製手かせで縛られた。彼女の手首にはまだ黒ずんだ傷跡が残っている。

「警察から『不法侵入をしている』というような警告があり、それから『これが最初の警告だ』というアナウンスがあったように思います。スピーカーの大きな怒鳴り声だったのでよく聞き取れませんでした。とつぜんぼくは両手を背中に回されました。びっくりして右手にちょっと力が入りました。すると警官は『抵抗している』と言って、ぼくに手錠をかけました」と、ハッサンが私に語った。彼は警官から学生かと訊かれた。そうだと答えると、お前はキャンパスへの立ち入り禁止だと即刻告げられた。「何の罪だとも聞かされないで、車に乗せられた。そのとき殴打されました。彼らは学生証の提示を求めました」とサイード。

サイードはシヴァリングムといっしょに大学警察車両の後部に乗せられた。シヴァリングムはきつい手かせを痛がっていた。サイードは警官に手かせを緩めてやれと頼んだ。警官は彼女を車からいったん降ろしてハサミでプラスチックを切ろうとしたが切れなかった。どこからかワイヤーカッターを探し出して、やっと手かせを切った。それから二人は大学内の警察署へ連行された。

サイードは携帯電話、キー、衣服、バックパック、エアーポッズを取られて、留置場に

入れられた。誰も彼に「ミランダの権利²」を読まなかった。お前はキャンパスへの立ち入り禁止だとまたもや言われた。彼は「それは学寮からの立ち退きということですか」と大学警官に尋ねたが、答えはなかった。彼は弁護士を要求した。こちらの準備が整ったら弁護士を呼んでもよいと言われた。「私の容疑は何か不法侵入みたいなことを言っていますが、はっきりとは覚えていません。私にはっきり分かるように言わなかったのは確かです」とサイド。

彼は自分の健康状態、医者にかかっているかどうかなどを尋ねる書類に書き込んだ。それから、やっと、お前の容疑は「反抗的な不法侵入」だと告げられた。「ぼくは学生ですよ。学生のぼくがキャンパスに入ったのがどうして不法侵入になるのです」と彼は大学警官に言った。「本当に彼らにはまともな答えがないようでした。ぼくはキャンパスへの立ち入り禁止は学寮からの立ち退きなのかと、同じ質問をしました。なにしろ、ぼくはキャンパス内の学寮に住んでいるのですから。彼らは「キャンパス立ち入り禁止」を繰り返すだけでした。それでは答えにならない、とぼくは言いました。彼らは後で文書で説明すると言いました。誰が文書を書くのかと訊くと、大学院の学部長だと答えました。

サイドは車で学寮へ連れていかれ、数分間、携帯電話充電器など必要なものを持ち出す時間を与えられた。それから彼らは部屋に鍵をかけたが、その鍵はサイドに渡さなかった。サイドは、他の学生と同じように、スモールワールド・コーヒーショップを避難場所とした。

シヴァリンガムは、夏休みにはしばしば生まれ故郷の南インドのタミール・ナドゥ (Tamil Nadu) に帰った。故郷の彼女の周りの人々の日々の貧困との闘いはいつも彼女を「目を覚ます」気持ちにさせたと、彼女は話す。「私の生活と彼らの生活の格差、同じ世界に住みながらそれをどう折り合いをつけたらよいのか」と、彼女は感情で声を震わせながら語った。「それは私にとっていつも奇怪なことでした。そのことから、私はこの世から不平等をなくする闘い、米国以外の国に住む人々も人間であり、尊厳ある生活をする権利に値する人間であるとする運動に熱を入れるようになったのです。」

その彼女はキャンパスから追放された人間の生活に適応しなければならなくなった。「何処かで寝る場所を見つけなければなりません。親には事の次第を話すけど、ちょっとやっかいな会話になるでしょうね。ともかく、私は刑務所へ行けないので、刑務所に入った人たちを支援しコミュニケーションできる術を見つけなければなりません。私は運動を続けます」と彼女は言った。

米国史には恥ずべき時代が何回もあった。先住民に対する虐殺。奴隷制。数百人の労働者を殺害した労働運動弾圧。リンチ。黒人差別と女性差別の法律 (Jim and Jane

² 米国で FBI や警察などの法執行機関が、身柄を拘束した被疑者を取り調べる前に、被疑者に対して告げられる 4 項目の権利。 黙秘権があること、供述は不利な証拠として採用される可能性があること、弁護士の立会を求める権利があること、経済的余裕がなければ公選弁護人を付けてもらう権利があることを告知する。

Crow)。ベトナム、リビア、イラク、アフガニスタン。

米国がガザのジェノサイドを支援し資金を提供していることも、この犯罪の大殿堂の中で大きな位置を占めている。

歴史は私たちにあまり優しくはないでしょうが、歴史はこの学生たちを祝福し敬うであろう。

クリス・ヘッジズはピューリッツァー賞を受賞したジャーナリストで、ニューヨーク・タイムズ紙の海外特派員を15年務め、中東支局長、バルカン支局長を歴任。それ以前はダラス・モーニング・ニュース紙、クリスチャン・サイエンス・モニター紙、NPRの海外支局長を務めた。番組 "The Chris Hedges Report" の司会者。